

## 枠外配置研究～前置詞句を中心に～

山崎 雄介

### 0. 序

- (1) *Ich habe lange auf diesen Tag gewartet.*<sup>1</sup>
- (2) *Ich habe auf diesen Tag lange gewartet.*
- (3) *Auf diesen Tag habe ich lange gewartet.*
- (4) *Ich habe lange gewartet auf diesen Tag.*

これらの文はいずれも意味内容としては同じことを表現したものであるが、伝達内容は同じでも、語順<sup>2</sup>が異なることによりそれぞれの文でその内容の伝わり方が少しずつ異なる。これらのうち例文(4)は一般に「枠外配置」と呼ばれるもので、ここでは定動詞 *habe* と過去分詞 *gewartet* によって構成される VK に囲われているはずの *auf diesen Tag* という SG が動詞枠の外へ出されて文の最後に加えられる、つまり NF に置かれるという形となっている。ドイツ語の構文における大きな特徴のひとつである「枠」の存在をいわば無視するような格好になるこの「枠外配置」と呼ばれる現象は、いかにして起こりうるのだろうか。本稿ではドイツ語における枠外配置

---

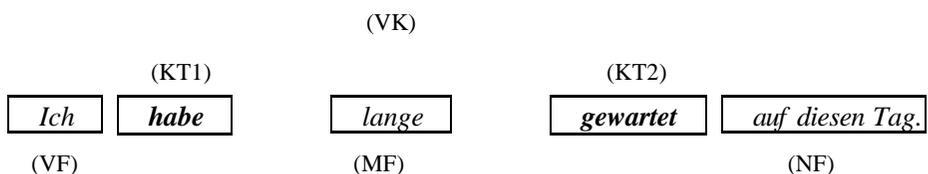
<sup>1</sup> 例文(1)から(4)は ENGEL (1994:182)より引用。

<sup>2</sup> 「語順」というとその名のとおり「単語の配列の順序」すなわち Wortstellung のことである。私がここで言う「語順」とは「文肢 ( Satzglied ) の配列の順序」すなわち Satzgliedstellung のことであり、本来ならば「文肢配列順」などと表記すべきであろうが、「語順」は人口に膾炙した表現であろうと考え、また、とくに誤解を招くようなことにはならないであろうと判断し、本稿では便宜上、Satzgliedstellung の意味でこれを用いる。

について論じるが、特に Hauptsatz における前置詞句の枠外配置に焦点を絞って考察する。

## 1. Feld という概念

下の図のように文は KT1 と KT2 とによって構成される VK によって 3 つの Feld<sup>3</sup>に分けられており、VK によって囲い込まれている部分を MF、KT1 より前の部分を VF、KT2 よりあとの部分を NF とする。



本稿においては Ausklammerung と Nachtrag の違いに関して考えることはせず、NF に SG が置かれているという現象全般を枠外配置と定義づけて論ずるということをここで断っておく。

## 2. 文の長さ、MF の長さ、SG の長さと枠外配置

<sup>3</sup> Feld という概念規定に関しては DRACH (1963<sup>4</sup>)をはじめとしてさまざまなものがあるが、今日では DUDEN (1995)や ENGEL (1988, 1994)におけるもののほうが一般的となっていると考え、本稿では Feld という概念について上図のように考える。

枠外配置の生じる原因/理由として私がまず考えたことは文の長さ、MFの長さである。枠外配置の原因/理由として文の長さ、MFの長さ、もしくはSGの長さを指摘するもの<sup>4</sup>もあるが、では、長い文、長いMF、長いSGといったものは、何をもって「長い」とみなされるのであろうか。

ここで本来であればコーパス等を用いてデータを収集し、それを分析し、その分析に基づいて論ずるべきであるのだが、データ収集の作業が思うように進まず、やむをえずコーパスの使用については断念せざるを得なかった。そしてそのかわりとして、LAMBERT (1976)のデータを参照した。

MF および NF の平均的な長さ、枠外配置の際の KT2 の分類と前置詞句の分類、統計などといったデータから、枠外配置における全体的な傾向としては NF よりも MF は短い、つまり、構成する単語数が NF よりも MF のほうが少ないということが分かる。

これはつまり、枠外配置という現象は VK をなるべく前方で閉じてしまって、文を理解しやすいものにしようとする働きをもつ傾向にあるということを示している、とは言えまいか。

しかし、これらのデータからは MF と NF との間にはっきりとした関係は認められない。ある程度の傾向を見出すことはできても、それ以上にまで発展させることは難しいだろう。いずれにしても、枠外配置は文の長さとは無関係ではない、ということは少なくとも分かった。

### 3. Thema-Rhema と枠外配置

文中に含まれる情報同士の価値の高低や新旧、未知か既知かなどといったことによって文はその姿を変える。この考え方は枠外配置にも当てはまるだろうか。

---

<sup>4</sup> Duden 1995:790, Eisenberg 1999:391, Engel 1994:201 など。

一般に、話の聞き手（もしくは読み手）にとって「旧情報」もしくは「既知の情報」とされるものが Thema として文の前方に置かれることが多く、「新情報」もしくは「未知の情報」とされるものが Rhema として文の後方に置かれることが多い。はじめに聞き手（もしくは読み手）が既に知っている情報を提示して何が話題となるのかを明らかにしたうえで（Thema）、そのあとに聞き手（もしくは読み手）が知らない情報、話し手（もしくは書き手）が伝えたい情報を示して話を展開させる（Rhema）のである。

ある特定の SG が聞き手（もしくは読み手）にとって「既知」である場合、この SG は Thema として文の前方に置かれることが多い。話し手と聞き手の双方で共有している情報である SG を Thema として文の前方に置くこと、多くの場合は VF に置くことは、Thema 化と呼ばれる。

また、前述の Thema とは逆に、ある特定の SG が聞き手（もしくは読み手）にとって「未知」である場合、この SG は Rhema として文の後方に置かれることが多い。

Thema 化された SG は文の前方に現れるが、それがむしろ多くの場合 VF に現れるのであれば Rhema 化された SG が文の後方ではなく NF に現れ、その結果として枠外配置の様相を呈しているとは言えまいか。

### 3.1. Rhema 化としての枠外配置

特定の SG を Rhema 化するには Rhema としたい SG を文の後方に置く：

- (6) *Dieser Zug fährt um 8.30 Uhr nach Schwerin ab.*  
 $E2_{\text{sub}} - \text{KT1} - \text{A} - E_{\text{prp}} - \text{KT2}$  (unmarkiert)
- (6') *Dieser Zug fährt nach Schwerin um 8.30 Uhr ab.*  
 $E2_{\text{sub}} - \text{KT1} - E_{\text{prp}} - \underline{\text{A (+rh)}} - \text{KT2}$

例文(6')は *um 8.30 Uhr* という A が Rhema 化された文であるが、ではここで、*nach Schwerin* という E2<sub>sub</sub> が Rhema 化される場合を考えてみる：

(6'') *Dieser Zug fährt um 8.30 Uhr nach Schwerin ab.*

E2<sub>sub</sub> - KT1 - A - E<sub>ppp</sub>(+ rh) - KT2

語順を見る限りにおいては例文(6'')は例文(6)と同じで、無標ということになってしまう。無論、発話の際の強勢によってこの問題は解決されるのではあるが、語順によって解決することはできまいか。Rhema は文の後方に置かれる傾向にあるのだが、無標の語順ですでに後方に置かれている SG はどのようにしたら Rhema 化を語順によってあらわすことができるのであろうか。*nach Schwerin* を後方に置いて語順による Rhema 化をして、例文(6)の無標の文との差も明確にするのであれば、このような SG を置くところはひとつしか残されていない。すなわち NF である：

(6''') *Dieser Zug fährt um 8.30 Uhr ab nach Schwerin.*

E2<sub>sub</sub> - KT1 - A - KT2 - E<sub>ppp</sub>(+ rh)

### 3.2. Thema 化としての枠外配置

さて、ここでは Rhema 化としての枠外配置とは違った視点で枠外配置を見てみたい。つまり Thema 化としての枠外配置という考え方なのであるが、この考え方は少なくとも私の管見の及ぶところでは見当たらない。

ここまで私は、ひとつの SG を前方または後方に移すことによって Thema 化ないし Rhema 化がなされ、Rhema 化の際にはその過程で場合によっては枠外配置が生じる、としてきたが、Thema ないし Rhema としてマークされる SG はひとつでなければ都合が悪いというわけではない。Thema にせよ Rhema にせよ、ある程度の幅を持っていて良いはずである：

(7) *Wir sprechen jetzt über das Thema „Thematisierung“.*  
 $EI_{\text{sub}} - KT1 - A - A$  (unmarkiert)

(7') *Jetzt sprechen wir über das Thema „Thematisierung“.*  
 $A (+ \text{th}) - KT1 - EI_{\text{sub}} - A$

(7'') *Jetzt sprechen wir über das Thema „Thematisierung“.*  
 $A - KT1 - EI_{\text{sub}}(+ \text{th}) - A$

例文(7')においては *jetzt* が Thema 化されて VF に置かれているのだが、例文(7'')では見かけ上の語順は例文(7')と同じなのだが *jetzt sprechen wir* を Thema と仮定してみた。ここで例文(7'')に助動詞を挿入するという操作を加えてみる：

(7''') *Jetzt wollen wir über das Thema „Thematisierung“ sprechen.*  
 $A - KT1 - EI_{\text{sub}}(+ \text{th}) - A - KT2 (+ \text{th})$

ところが、例文(7''')は動詞 *sprechen* までが Thema であったので、これでは例文(7'')における Thema を十分に反映した操作とは言えない。ではどのようにすれば例文(7'')に助動詞を加えるという操作を施してもなお例文(7'')の Thema が十分に反映されているような文をつくることができるのだろうか。そこで私が考えたのが、Thema 化としての枠外配置という考え方である。助動詞を加えてもなお例文(7'')の Thema を損なわない文として私が考えたのは：

(7''''') *Jetzt wollen wir sprechen über das Thema „Thematisierung“.*  
 $A - KT1 - EI_{\text{sub}} - KT2 (+ \text{th}) - A$

という文である。つまり、Rhema 化としての枠外配置とは逆の視点から枠外配置を捉え、Thema 化としての枠外配置という考え方をを用いると、例文(7''''')においては *über das Thema „Thematisierung“* という A が Rhema 化によって後方に移動したと考えるのではなく、助動詞の挿入によって KT2 とな

った動詞 *sprechen* が Thema 化によって前方に移動したと考えられるのである。

これらの例文を見ると、Thema 化された複数の要素が文の前方に集まって Thema 領域を構成し、それとともに VK までもが前方に移動した結果として SG が文の後方に残ってしまった、という様子がよく分かる。端的に言えば、結果論的な枠外配置ということになる。

しかしながら、この Thema 化としての枠外配置という考え方が根本的に抱える問題点は、結局のところ語順のみを見る限りにおいては見かけ上、Rhema 化と何ら変わったところがないという点にある。当然のことながら、無標の文でない限りは文には必ず Thema と Rhema が存在してしかるべきなのであって、ここに挙げた例文(7)はこういったことに鑑みれば(+ th)というマークと同時に(+ rh)というマークも付されねばならないであろう。たしかに問題点の多い考え方ではあるが、基本語順から逸脱した文の構造というものを考えるうえでは、Rhema 化としての枠外配置という考え方も Thema 化としての枠外配置という考え方も、有意義であるということだけは少なくとも確かであるとは言えまいか。

#### 4. まとめ

Rhema 化としての枠外配置という現象に言及している文献はあるのだが、逆の視点から、つまり Thema 化という視点から枠外配置という現象を眺めているような文献に（ひょっとしたらそのような文献も存在するのかもしれないが）私は出会わなかったので、大袈裟な言い方をすれば「新たな視点」ということで提案してみたのが 3.2.の「Thema 化としての枠外配置」であった。

枠外配置という現象に関して私が当初考えていたその原因/理由は、見通しの利きにくい複雑な文を見通しが利きやすくなるように整理して構文を明確にするため、ということと、もうひとつは（ひとつでも複数でもかま

われないが) 特定の SG の Rhema 化のため、という 2 点であった。前者に関しては、やむをえず LAMBERT (1976) のコーパス分析を参考としてある程度の基準のようなものがないわけではなさそうだがということが分かった。そして後者に関しては、Rhema 化という意図が必ずしも働いているとは限らないのではないかと考えるに至った。そして枠外配置全般に関して誤解を恐れずに言えば、枠外配置が生じる原因、理由、条件めいたものは存在するにしても、それらは極めて曖昧模糊としていて明確に規定することはきわめて困難であろうと言わざるを得ない。

なかば思いつきで「新しい視点による提案」などと言い放ってしまった「Thema 化としての枠外配置」についてはその是非も含めてこれからさらに検討すべきであろうし、本稿では迂回して通ってしまった「文の強勢による Thema-Rhema」についても、本来ならば発話の際の強勢も含めて Thema-Rhema である以上は、今後はこれを避けて通ることは許されまい。

## 略号<sup>5</sup>

A	Angabe
E1	Ergänzung のうち、強勢の置かれない人称代名詞からなるもの
E2	Ergänzung のうち、定 (definit) であるもの
E3	Ergänzung のうち、不定 (indefinit) であるもの
E <sub>akk</sub>	Akkusativergänzung
E <sub>dat</sub>	Dativergänzung
E <sub>sub</sub>	Subjektergänzung
E <sub>prp</sub>	Präpositionalergänzung
KT1	erster Klammerteil
KT2	zweiter Klammerteil
SG	Satzglied

---

<sup>5</sup> 本稿で使用する略号のうち、Ergänzung に関するものについては ENGEL (1994) で使用されているものに従った。

th	thematisiert
rh	rhematisiert
VF	Vorfeld
MF	Mittelfeld
NF	Nachfeld
VK	Verbalklammer

### 主たる参考文献

ADMONI, Wladimir (1982)

Der deutsche Sprachbau.

München: Beck (4., überarb. u. erw. Aufl.)

BENEŠ, Eduard (1968)

*Die Ausklammerung im Deutschen als grammatischer Norm und stilistischer Effekt.*

Mannheim: Bibliographisches Institut (Muttersprache; Bd. 78: 289-298)

DRACH, Erich (1963)

Grundgedanken der deutschen Satzlehre.

Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft (4., unveränderte Auflage)

DUDEN (1995)

Grammatik der deutschen Gegenwartssprache.

Mannheim; Leipzig; Wien; Zürich: Dudenverl. (5., völlig neu bearb. u. erw. Aufl., bearb. von Günther DROSDOWSKI u.a.) (Duden; Bd. 4)

EISENBERG, Peter (1999)

Grundriß der deutschen Grammatik. Bd. 2. Der Satz.

Stuttgart; Weimar: Metzler

EISENBERG, Peter (1986)

Grundriß der deutschen Grammatik.

Stuttgart: Metzler

ENGEL, Ulrich (1994)

Syntax der deutschen Gegenwartssprache.

Berlin: Erich Schmidt (3., völlig neu bearb. Aufl.) (Grundlage der Germanistik; Bd. 22)

ENGEL, Ulrich (1988)

Deutsche Grammatik.

Heidelberg: Groos

EROMS, Hans-Werner (1986)

Funktionale Satzperspektive.

Tübingen: Niemeyer (Germanistische Arbeitshefte; 31)

FLÄMIG, Walter (1991)

Grammatik des Deutschen: Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge; erarbeitet auf der theoretischen Grundlage der „Grundzüge einer deutschen Grammatik“.

Berlin: Akad. Verl.

HELBIG, Gerhard / BUSCHA, Joachim (1988)

Deutsche Grammatik: ein Handbuch für den Ausländerunterricht.

Leipzig: Verlag Enzyklopädie (11., unveränd. Aufl.)

川島 淳夫(Hrsg.) (1994)

ドイツ言語学辞典.

東京: 紀伊国屋

KEFER, Michel (1989)

Satzgliedstellung und Satzstruktur im Deutschen.

Tübingen: Narr (Studien zur deutschen Grammatik; Bd. 36)

LAMBERT, Jean Pamela (1976)

Ausklammerung in modern standard German.

Hamburg: Buske (Hamburger Phonetische Beiträge; Bd. 21)

SOMMERFELDT, Karl-Ernst (1993)

Operationale Grammatik des Deutschen: Eine Skizze.

München: Iudicium

WELKE, Klaus (1993)

Funktionale Satzperspektive: Ansätze und Probleme der funktionalen Grammatik.

Münster: Nodus (2., durchges. und überarb. Aufl.)

ZAHN, Günther (1991)

Beobachtungen zur Ausklammerung und Nachfeldbesetzung in gesprochenem Deutsch.

Erlangen: Palm und Enke (Erlanger Studien; Bd. 93)

本稿は、早稲田大学大学院文学研究科に提出（2003年1月）した修士論文概要書に加筆，訂正を施したものである。

（やまざき ゆうすけ）